

教育センターだより



南砺市教育センター

学校教育に求められるもの

南砺市教育センター 所長 新明 春生

外山滋比古氏の著書「思考の整理学（1983年刊行）」を再読してみました。その本では、学習スタイルや学習者の姿を「グライダー」や「エンジン付き飛行機」に例えた記述が何箇所もなされています。「グライダー」のように指導者や友達のサポートを受けながら受動的に学ぶ姿と、「エンジン付き飛行機」のように、課題を自分で設定し、自力で解決していく主体的な学びの姿を挙げ、これからの時代に必要とされる教育の在り方を「自力で飛び回れる飛行機人間である」と述べています。

さらに、グライダー訓練を主とするような教育では創造性を培うことができず、コンピュータに仕事の間を奪われてしまうとも述べています。「コンピュータができない仕事をどれくらいできるかによって社会有用性に違いが出てくる」と、AI等の先端技術が進展している現代を見越していたかのような記述です。外山氏の主張は40年ほど前のものですが、人間としての強みはどこにあるのか、学びにどう向き合えばよいのかを問うものであり、それは現代においても学校が考えていかなければならないことだと思います。

現在、学校教育には、他者と協働して課題を解決することや新たな価値を創造することといった能力の育成が求められています。そのような状況だからこそ、教育において大切なことが何かを考えて、どのような児童生徒を育成していけばよいか、また、そのような児童生徒を育成するためにどのような教育をしていけばよいかを各学校で共通理解し、学校全体で実行していくことがますます重要になってきています。

教育センターとして、学校教育の充実に向けて、研修や研究の面から少しでも各学校をサポートできればと思っています。

第15回南砺市小・中学生科学展覧会

- 日時 令和元年9月14日（土）～15日（日） ■ 会場 井波総合文化センター
- 出品数 小学校より81点（低学年29点、中学年25点、高学年27点）、中学校より28点
- 来場者 約460名

今年度も、数年にわたり継続して研究した作品、身近な生き物や自然、環境等をテーマとして研究した作品、学習や遊びの中での感動や疑問を追究につなげた作品等が多く見られました。

授賞式では、審査委員長の上平小学校、林 秀次校長先生より、研究の独創性、追究への意欲、追究過程、記録の考察やまとめる表現力等の観点から講評をいただきました。来場者の皆さんは、子供たちのがんばりに感心しながら、丁寧に作品を見ていかれました。

審査の結果、優秀賞に選ばれた10点の内5点が10月17日（木）～21日（月）に富山市科学博物館で行われる第78回富山県科学展覧会に出品されます。受賞者は、各校配付の「受賞者一覧」をご覧ください。



スタディ・メイト等研修会

- 日時 令和元年6月25日（火） 14：30～16：00
- 会場 井波庁舎
- 講師 射水市立大門小学校 通級指導教室 教諭 高島 佳江 先生
- 参加者 37名（スタディ・メイト：小24名 中6名、適応指導員小中各1名、外国語指導員1名、SSW等4名）
- 内容 特別な支援を必要とする子どもたちへの理解と対応の仕方

◆ スタディ・メイトの支援の留意点

- ・担任と立ち位置についてよく話し合っておく。
- ・担任に注目するように導く。
- ・子供の自立心を養う。見守る支援をする。

◆ 支援の基本

- ・ただありのままの子供を認め、子供が一人のできるようになることをサポートする、人間理解の教育である。一人一人が違うので、丁寧にサポートしていくという根気強さが求められる。

◆ 支援の5つの視点

- 1 心の支援 2 発達論による支援 3 行動への支援 4 環境調整による支援
- 5 周囲の人との連携による支援



高島先生おすすめの本です。2冊とも当センターで貸し出しできます。

<参加者の感想より>

- ・家庭と子供の集団、どちらの中でも一人の人間として尊厳されることが大事。連携していく大切さを改めて感じた。
- ・生徒たちと向かい合う大切さを改めて重く受け止めている。現場でも少しでも活かしていけるように努力していきたい。
- ・担任の先生方と子供たちのことについて情報をもっと共有し、一人一人に応じた支援ができるようにしたい。



学級担任との役割分担を明確に

ふるさと学習研修会

- 日時 令和元年7月29日（月） 14：00～16：30
- 会場 井波地域
- 参加者 17名（新規採用教員：小9名 中7名、希望者：小1名）
- 見学 井波彫刻総合会館、井波八幡宮、井波別院瑞泉寺、やえもんや、八日町通り等

<参加者の感想より>

- ・井波の文化財とそれを守る人々のストーリーが聞けてよかった。人々が文化財と共存して暮らしているのが素晴らしいと思った。生徒にも、ただ文化財だけを見るのではなく、そこに暮らしている人々やボランティアガイド、地域活性化に尽力している人々等のストーリーを聞かせたい。
- ・人もまちも、自らに誇りをもっていることがよく分かった研修だった。ボランティアガイドさんの生き生きとした話ぶりからも伺えた。知識としてふるさとを知るだけでなく、人に会ったり、ものに触れたりすることで、分かることが大切だと感じた。ふるさと教育をするときに、重視したい。



瑞泉寺



八日町通り



井波彫刻総合会館

学力向上研修会

- 日時 令和元年8月5日(月) 13:30~16:30 ■ 会場 井波庁舎
- 講師 南砺市教育長 松本 謙一
- 参加者 29名(小15名 中14名) 教務主任、研究主任、希望者
- 内容 授業の見方を学び、子供の見取りの力を付け、子供と共に授業を創る教師を育成する。

◆ 授業の見方のポイント

- 1 子供の立場から見る。
- 2 授業記録を取り、事実から解釈する。
- 3 「挙手」「つぶやき」から解釈する。
 - 何を言ったか ● なぜ、その発言をしたか

<参加者の感想より>

- ・子供の様子を見て、授業を進めることが大切である。そのために「どんな反応をするか」「どんな考えをもつか」を単元構想時に考えることが大事である。
- ・日々、「聴くこと」の大切さを子供たちに語り、聴くことができる子供を育てていきたい。
- ・「何のためにその支援を行うのか」「どのような形で子供の意見を取り上げるのか」ということを考え、ねらいに迫るための意味ある手立てとなっているのかを吟味していきたい。
- ・授業の中で、教師が気付きをもつようにしていく。子供が主体の授業となるために、何が大切なのかを校内研修で共有したい。



授業の動画から、子供を見取る



小中混合グループで見取りの力を鍛える

南砺市教育講演会

- 日時 令和元年8月9日(金) 13:30~16:30 ■ 会場 井波総合文化センター
- 講師 國學院大学 人間開発学部初等教育学科 教授 田村 学 先生
- 参加者 263名 (南砺市悉皆:小134名 中103名、市教委等17名、小矢部市5名、砺波市4名)
- 内容
 - ・報告:国内長期研修「ICT活用による授業の工夫」平中学校 教諭 木村 康彦先生
 - ・講演:主体的・対話的で深い学びの実現に向けて
—授業のイノベーションとカリキュラム・マネジメントの充実—

◆ 「主体的・対話的で深い学び」を実現する教師力

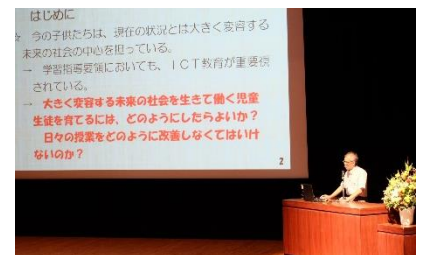
- 1 子供の姿や発言を丁寧に見る、聞く(捉える)
- 2 子供の思いや願いを理解する(解釈する)
- 3 本時のねらいとの関係を考える(照合する)
- 4 どのように振る舞うかを決める(判断する)
- 5 分かりやすく板書したり、端的に発問したりする(振る舞う)

◆ 「授業研究」の意識転換

- ・授業者の力量→参観者の姿勢と力量
- ・協議会では、固有名詞を出し、より具体的な子供の姿で語ること

<参加者の感想より>

- ・深い学びについて「つなぐ、つなげる、つながる」のキーワード、図、具体的な子供の発言で教えていただき、とてもすっきりとした。
- ・一つ一つの知識が、どのようにつながるのかを子供目線でイメージしておくことが、深い学びにつながると考えた。
- ・子供を見取る力を高めていく授業研究にも力を入れたい。
- ・今まででもやもやしていたことが、具体的な事例ですっきりし、やる気の出る本当によい講演だった。



子供のやる気を引き出す ICT 活用を



求められる教師力は、
子供を「見取る力」「イメージする力」

外国語活動・外国語科研修会（砺波地区準協業研修）

- 日時 令和元年8月23日（金） 13:30~16:40 ■ 会場 井波総合文化センター
- 講師 文部科学省 初等中等教育局 視学官 直山 木綿子 先生
- 参加者 170名（南砺市悉皆：小117名 中15名、小矢部市6名、砺波市10、教育事務所等22名）
- 内容 小中学校9か年を見通した外国語教育

◆ 外国語教育における言語活動とは

- ・「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」活動。小学校外国語活動より実施していく。

◆ 思考力・判断力・表現力等を身に付けるには

- ・コミュニケーションを行う目的や、場面、状況等を明確に設定する。

◆ 言語活動「Small Talk」（5・6年）〔進め方 例〕

- 1 指導者と児童で簡単なやり取り（話題・言い出し方の提供）
- 2 児童と児童でやり取り（まずは、やってみる）
- 3 指導（言えなかったことを、既習表現に結び付けられるようにヒントを出す。みんなで既習表現を使ってどう表現すればよいか考える）
- 4 相手を替えて児童と児童でやり取り（既習表現を意識して活用する）



「即興的に」
「考えること」が重要

<参加者の感想より>

- ・「思考力・判断力・表現力」についての考え方がすっきりした。子供が「何を言おうかな」「どうやって言えばいいのかな」と考えたいような目的・場面・状況をつくり、明示していくことが大切だと思った。言語活動についても具体的に体験しながら学ぶことができた。言語活動を授業の中心に据えることを念頭に、授業を構成したい。
- ・小学校への外国語活動・外国語科導入に向けてやるべきこと、中学校の英語科担当として準備しておくことが改めて見えてきた。「英語」を教えるのか、英語を通じて「コミュニケーション力」が身に付くことを指導するのかで、子供が身に付ける英語力が大きく違ってくると思う。よりよい実践となるように、自分の授業を振り返り、考え直してみたい。

資質能力向上研修会（砺波地区協業研修）

- 日時 令和元年9月17日（火） 15:00~16:45 ■ 会場 市地域包括ケアセンター
- 講師 劇作家・演出家・青年団主宰 平田 オリザ 先生
- 参加者 204名（小95名 中41名 園6名 行政23 小矢部市16名 砺波市22名 他市1名）
- 内容 いま、なぜ、コミュニケーション教育か？ ―非認知スキルと新しい学力―

◆ 異文化理解能力

- ・多様な人間と折り合いをつけて生きる力、その基盤となるのがコミュニケーション能力である。なぜこんなことを言うのだろう、相手は何を望んでいるのだろうと、思いをはせる「異文化理解能力」を身に付けることが大切である。

◆ 合意形成能力

- ・価値観がバラバラで、分かり合えない人間同士が、社交性を発揮し、共有できる部分を見つけて、それを広げていく「合意形成能力」を身に付けることが大切である。



学びのモチベーション

「伝えたいという気持ちをもたせる教育へ」

<参加者の感想より>

- ・「みんな違って大変だ」・・・人それぞれに与えられた環境や背景が違うから、意見が違って当たり前。それをどのように折り合いを付けるか。まとめる力や社交性が、生きていく上でとても大切だと思った。自ら人と関わり、コミュニケーションをとれる子供を育てるためにも、学校教育の中で、「人と関わる機会をつくること」「教師が言葉を勝手に取り上げ、先回りして話さないこと」を大切にしたい。
- ・様々な感じ方がある中で、少数の意見を活かしたり、折り合いをつけたりし、協力してやり遂げていく経験を通して、「どうにかしてうまくやっていく能力」を身に付けていくことが、学力、学ぶ力にもつながっていくのだということを知った。子供たちがそのような経験を積んでいけるように、場の設定をしていきたい。